

ヘッセの『デーミアン』における「共時的」現象について

竹岡, 健一
鹿児島大学法文学部

<https://doi.org/10.15017/21865>

出版情報：九州ドイツ文学. 20, pp.93-109, 2006-10-10. 九州大学独文学会
バージョン：
権利関係：

ヘッセの『デーミアン』における 「共時的」現象について

竹 岡 健 一

はじめに

本稿の研究対象は、ヘルマン・ヘッセの『デーミアン』（1917年成立）に見られる「共時的」現象である。「共時性」Synchronizitätとはユング心理学の重要な概念であり、第六感や透視、予知夢などに見られる二つの出来事の「意味のある偶然の一致」を意味するものであるが、『デーミアン』の中には、これに類した現象が少なからず見られる。そこで、本作品においてこのような現象が持つ意味について、詳しく考察したい。

ところで、『デーミアン』成立の背景には、1916年のユング派の医師によるヘッセの精神分析治療と1917年のユング本人との出会いがある。そのため、この作品については、ユング心理学的な観点からの考察が少なくない。とりわけ、主人公ジンクレールの成長をユング心理学における「個性化」の過程と捉えた場合に、デーミアンを始めとする他の登場人物がいかなる役割を果たしているのかといった点については、すでに様々な考察がなされている。また、ユングとヘッセの伝記的な関係についても、研究が進んでいる。しかしその一方で、本作品に関する共時性という観点からの考察は、もっぱらユング心理学的な研究においてさえ、ほとんどなされていないのである。¹⁾

それに対し、本稿では、このような現象の詳しい考察を通して、主に次のようなテーゼを主張したい。すなわち、『デーミアン』においては、共時的現象が物語の展開にとって不可欠な、重要な要素となっていること、そしてまたそのことが、合理主義的な世界観に対する批判という作品の主題と緊密に関わっているということである。

1. ユングの「共時性」概念

(1) 「共時性」の意味と3タイプ

そこでまず、『デーミアン』に関する考察に先立って、ユング心理学における「共時性」の概念について確認しておきたい。²⁾

この概念についてユングが正式に表明したのは、1951年にアスコーナのエラノス会議で行われた講演『共時性について』³⁾と、1952年に物理学者W・パウリの論文とともに『自然現象と心の構造』の中で発表された論文『非因果的連関の原理としての共時性』⁴⁾においてであった。それらによれば、共時性とは、二つかそれ以上の事柄が「意味を持って偶然に一致」⁵⁾することを意味している。また、このような現象に対する彼の関心が特

に高まったのは1920年代半ばからであり、その契機として、例えば次のような出来事があげられている。すなわち、彼の女性患者の一人が、治療の決定的な時期に、コガネムシの形の金色のアクセサリーをもらった夢を見たが、彼女がユングにこの夢について語っていたとき、まさに本物のコガネムシが一匹飛んできて、窓ガラスをやさしくノックしたというのである。この出来事は、その非合理性ゆえに、この患者の合理主義的思考を和らげ、治療を前進させる重要な出来事となったのであった。⁶⁾ このように「あまりにも意味深く結びついているために、それが〈偶然〉一緒に起こったとはとても信じられないような〈偶然の一致〉」⁷⁾ について、ユングは、次のような三つのタイプに分類している。

タイプ1：観察者のある心的状態と、それと同時に生じる、心的な状態または内容に対応する客観的、外的な出来事との偶然の一致。

タイプ2：ある心的状態と、それに対応して（多少とも同時に）生じるが、観察者の知覚野の外部、すなわち遠方で生じ、後になってはじめて確認できる外的な出来事との偶然の一致。

タイプ3：ある心的な状態と、それに対応する、いまだ存在していない未来、すなわち時間的に離れており、後になってはじめて確認できる外的な出来事との偶然の一致。⁸⁾

なお、ユング自身を取り上げている事例のなかから、それぞれに対応するものを一つあげるなら、タイプ1としては上記の「コガネムシの形のアクセサリー」の出来事が、タイプ2としては18世紀の科学者兼秘思想家スウェーデンボリによる「ストックホルムの火事」の透視がある。⁹⁾ また、タイプ3としては「スペイン旅行の夢」と呼ばれる事例があり、これはユングの学生時代の友人がスペイン旅行の夢を見、実際に旅行に出かけたときに、夢に見たのと同じ光景に遭遇したというものである。¹⁰⁾

(2) 「共時性」のメカニズムと問題点

ところで、こうした共時的現象はどのようにして生じるのだろうか。そのメカニズムを解く鍵となるのは、「集合的無意識」というユングの考え方である。つまり、ユングにおいては、この個人を超えた、人類共通の無意識によって、人間の心は時空を超えて他者の心や有機的な自然と一つに連なりあっていると考えられているのである。¹¹⁾ そして、その集合的無意識の中に普遍的な「行動の型」として存在し、心と物の双方にまたがって影響を与えうる「類心的」psychoid¹²⁾ な性質を持つ「元型」の働きが、共時的現象を引き起こすというのである。つまり、元型が関与することによって、精神と物質との間の壁を打ち破るような偶然の一致が生じるわけである。例えば、個人の精神が困難な状態に直面したり、発達の過程における重要な局面に出遭ったときなどに、「元型」の働きが活性化することによって、個人の内的世界における問題のありように対応するように、外的世界の物事や事象が、ある特定の配置を持って現われてくるわけである。このような配置のことを、

ユングは「布置」Konstellation¹³⁾と呼んでいる。

もちろん、こうした考え方には、反証不可能で非科学的だと感じられる側面も含まれていることは否めない。例えば、ユング自身認めているように、元型それ自体は不可知であり、その意味では、共時性のメカニズムを科学的に立証することは不可能に近いのである。¹⁴⁾ だが、本稿はこの問題そのものについて論ずる場ではない。そこで、ここでは、この点に関するユングの考え方を確認することで議論を留めておきたい。まず第一に、ユングが「懐疑的態度は不正確な理論にのみ向けられるべきで、正当な事実に向けられるべきではない」¹⁵⁾ と述べているように、そのような現象が事実として存在することは否定できないということである。そして第二に、ユングが「＜説明可能性の欠如＞は、単に原因が未知であるといった事実から生じるのみならず、そのような同時発生が私たちの説明の仕方では考えられないという事実から生じるのである」¹⁶⁾ と言っているように、共時性を説明できないとすれば、その問題に対する取り組み方に原因の一端があるとも考えられるということである。

(3) 「共時性」の現代的意義

さてそこで、共時性の理解を困難にしているのが「因果論の全能に対する根っからの信念のみ」¹⁷⁾ だというユングの立場に一定の理解が与られ得るとすれば、そこから現代人の認識の枠組みや世界観の見直しが迫られる可能性も生じると言える。そして、共時性に対するユングの関心の意義というものも、実はまさにそこにあるのである。そこで、共時性の有する特色とそれが喚起する問題について、ここで簡単にまとめておきたい。¹⁸⁾

- (1) **心と物の一致**：精神の領域に属する内容と物質の領域に属する内容とが一致すること。このことは、近代的な「物心二元論」の考え方、つまり科学が拠って立つパラダイムに反しており、心の世界と物の世界が共時性によって交差することを体験できる世界というものが存在する可能性を示唆している。
- (2) **時間と空間の相対化**：とりわけ上記のタイプ2と3の場合、空間的に離れた遠方（「ここ」ではなく「あそこ」）や、時間的に離れた未来（「いま」でなく「以後」）での出来事が「ここで・いま」起きている出来事であるかのように、体験者によって知られる。つまり、共時性においては時間的・空間的な隔たりが相対化されるのであり、この点で、日常的な経験とは異なっている。
- (3) **非因果性**：心と物というそれぞれ独立した系列に属する二つの系が出遣い、そこには「原因と結果」という「因果的連関」がない。むしろ、心的表象（夢、思いつき、幻覚など）が先行した後に、外界に対する知覚がそれに対応することで意味が発生しており、意味を了解することが通常とは逆の形でなされている。したがって、物の世界は「因果論的」に決定されているという世界像を刷新し、「非因果的連関の原理」を想定する必要が生じる。
- (4) **主体の関与**：直接的あるいは象徴的な意味を媒介とする、心理的現象と物理的現象の結びつきは、個々の現象を一つのまとまりとして見たときに出現する一定のパターン、

すなわち「布置」である。その場合、現象が有意性を帯びるには、観察者本人がその現象に気づき、何らかの意味づけをしなければならない。つまり、共時性には「主体の関与」が不可欠であり、この点において、観察する人間やその心のあり方を抜きにして事実を客観的に観察する近代科学とは異なっている。

- (5) **運命的意味**：体験者のその後の人生を変えるような、運命にかかわる重大な意味を持ちうる。傍目にはただの偶然の一致に過ぎないものが、体験者の実存を組み替え、新たに意味づけるきっかけともなる。偶然の出来事が、単に偶然へと還元できない、ある種の必然性さえ帯びてくる。一つの出来事が、個の人生へ組み込まれ、時として運命にまで高められ、人生の重大な局面で起こる一回限りの出来事として、体験者自身の生の現在について何らかの示唆を与え得るほどの意味深さを持つのである。
- (6) **超越の意味**：「布置」とは個人と環境とを等しく貫いてそこに表出している事象の全体的パターンであるが、ここに心理的・物理的なものを超えたある種の超越的な力を感じることは難しくない。そこでは、有機的意味によって結びついた一つの宇宙が直感され、主体としての人間が、逆に生命という深層の次元からの働きかけを受ける客体となる。自分を孤立した存在と感じず、深い、意味のあるレベルにおいて、他者と宇宙に対するつながりを感じるのである。人間を畏怖させると同時に魅惑するような宗教的感情を引き起こす共時的体験は、近代的な個人主義を基調とする人生観と大きく異なる。
- (7) **感情との相関**：共時的現象は、まったくランダムに起こるのではなく、環境の側か自己の側か、いずれかで大きな変化が進行しているときに起こる傾向がある。情緒的緊張が高まったとき、つまり危難に遭遇するなどの「元型的状況」においてや、強い感情の絆によって結ばれた親密な人間同士の間で生じることが多い。この意味でも、機械的な事物の生起とは異なっている。

以上のように見ると、共時性は、日常的な物事の経験や科学的な考え方とは異質な、ある意味で「非合理」な体験であるが、それゆえにこそ、近代科学の基礎となっている「物心二元論」や「合理主義的世界像」に対するアンチテーゼともなりうるものである。共時性は、いわば脱魔術化された世界の中に、ある種の同調性や感応性という目に見えないコードが存在することを示している。そのコードは、因果律のように観察者である人間がそこにいてもいなくても事象のうちで作用している法則ではなく、人が自らの内部を深く知るときに初めて、自己と外界の出来事との同調を意識させてくれるようなものであり、ひとりひとりの人間が、外部の世界に関与し、共鳴しながら生きる一個の小宇宙であることを教えてくれるのである。

2. 『デーミアン』における「共時的」現象

既に述べたように、共時性へのユングの関心が特に高まったのは1920年代以降である。しかし、『非因果的連関の原理としての共時性』に付された注では、ユングは、そうした関心を抱いた時期をさらに遡り、すでに1916年の時点で、「心理学における因果的原理の無限の適用」に対する批判を表明していたと付け加えている。¹⁹⁾ この1916年という時期は、『デーミアン』の成立時期にも近く、注目に値する。というのも、1917年9月7日、ヘッセはベルンのホテルでユングと夕食を共にしており、そのさいに共時性に関する事柄が話題になったとも考えられるからである。²⁰⁾ しかも、『デーミアン』は、丁度この年の9月から10月にかけて、集中的に執筆されているのである。

ではここで、『デーミアン』に見られる共時的現象に移ろう。この作品には、不可思議な出来事が大変多く見られるが、とりわけはっきりと共時的な性質を具えたものとして、次のような事例があげられる。

- (1) ジンクレールは、自分の描いた絵をデーミアンに送るが、差出人の名は書かない。にもかかわらず、彼はデーミアンからのものと思われる返事を受け取る。しかも、その直後のフォレン博士の授業が、その返事の内容と深く関わっている。(第4章から第5章)
- (2) ジンクレールは、ある夜、目を覚まし、大きな不安に駆り立てられながら、当てもなく町を彷徨う。すると、自殺を企てる寸前のクナウアーに出会い、彼を救う。(第6章)
- (3) 大学進学前の休暇中、ジンクレールは、以前のデーミアンの家を訪れる。そのとき初めて、写真に写ったエヴァ夫人の姿が自分がかつて見た夢の像とまったく同じであることを知る。(第7章)
- (4) デーミアンの援助を必要としているジンクレールが、入学したH大学のある町で偶然彼と出くわす。(第7章)
- (5) 物語の結末近くで、ジンクレールは、空に巨大な鳥の幻影を見る。それをデーミアンは、人類の運命を予知するものと解釈する。デーミアンによれば、彼とエヴァ夫人も同じようなことを夢に見ており、彼は古い世界の崩壊を预言する。その直後に戦争が勃発する。(第7章)

これらの出来事は、次のような点で共時的現象と見なされ得る。つまり、夢に現われる心的な出来事と外界の物理的出来事が密接に関連し合っていること、離れた場所にいる人間同士が不思議なつながりを持っていること、あるいは主人公にとって深い意味が与えられることなどである。上記のタイプに照らしてみれば、(1)・(2)・(4)は「タイプ1」に、(3)・(5)は「タイプ3」に分類されるであろう。なお、『デーミアン』には、共時性との関連づけが可能な現象は他にも指摘され得るかもしれない。²¹⁾ だが本稿では、その可能性がきわ

めて高いこれら五つの出来事に考察の対象を限定したい。と言うのも、これらだけでも、『デーミアン』という作品において共時的現象がいかに重要な意味を持っているかを明らかにするには十分だと思われるからである。

それでは次に、一つ一つの出来事について、より詳しく考察して行きたい。

(1) 第一の出来事

この出来事は、第4章の終わりでジंकレールが描く絵、つまり「黒い地球のなかに半身をうずめ、青い大空を背景にして、巨大な卵から抜け出るようにそこから出ようと」(303)²²⁾している「ハイタカの絵」(304)にまつわるものである。

この章で、ジंकレールは、デーミアンとの関係について次のように述べている。彼は、S町の寄宿学校に入った初めの頃デーミアンに二度手紙を出したが返事をもらえず、そのことで恨みを抱いていた。結局、たった一度だけ休暇中に郷里の町で出会った以外は、その後何年も会っておらず、会いたい気持ちが強くなる一方で、まったく消息が分からなかった。その上彼は、デーミアンあての手紙を書くことは、「宛先がわかっていたとしても不可能だっただろう」(303f.)とも考えている。にもかかわらず、絵が出来上がったとき、彼はそれをデーミアンに送ろうと決心する。だが、奇妙なことに、絵以外には何も、自分の名前さえ書かずに、デーミアンの元の住所へ発送するのである。これでは、仮に絵が届いたとしても、デーミアンには差出人がわからず、返事を出すことは不可能ではないだろうか。

ところが、第5章に入り、ある日、学校の休憩時間の後で、ジंकレールは一枚の紙切れが本に挟まっているのを見つけ、それを読んだとき、「疑う余地などない。デーミアンからの返事だ」(305)と直感的に確信する。そこに書かれていたのは、「鳥、卵から抜け出さんとす。卵は世界なり。生まれんとする者、世界を破壊すべし。鳥、神へと飛びゆく。神の名はアブラクサスなり」(305)という言葉だが、ジंकレールは、鳥のことはデーミアンと自分しか知らないのだから、デーミアンはその絵を受け取って、意味を解くのを手伝ってくれているのだと考えるのである。ちなみに、物語の初めのほうで、確かに二人の間でジंकレールの家の紋章の鳥のことが話題になってはいるが、必ずしもここで関連づけられる必然性はない。またいずれにせよ、ジंकレールには、そこに記された「アブラクサス」の意味が理解できない。するとそこへ、次の授業時間に、大学を出たばかりの若い助教師であるフォレン博士が、ヘロドトスに関する授業の中でこの神に言及し、「アブラクサス」が有している「神的なものと思魔的なものを調和させるといふ象徴的な使命」(306)を明らかにするのである。

このエピソードには、不可思議な点が少なくとも二つ見られる。その一つは、ジंकレールが見つけた紙切れがデーミアンによって直接本に挟まれたということとはあり得ないにもかかわらず、丁度ジंकレールがデーミアンから期待していたような内容が書かれた紙切れが時宜に適った形で彼の手落ちるといふことであり、もう一つは、その紙に書かれた言葉に関する謎解きが、これまた時宜に適った形で、フォレン博士によってなされるとい

うことである。こうした点について、従来の研究では、どのような解釈がなされているのだろう。

実は、『デーミアン』に見られる不可思議な出来事の中でも、この鳥の絵に関するエピソードは、研究論文の中で言及されることだけは最も多い。ところが、その多くは、出来事の不可思議さを強調するのみであり、一体なぜそのような出来事が起こりえたのかという肝心な点については、二通りの説明しか試みられていない。

その一つは、きわめて現実的な解釈であり、絵を受け取ったデーミアンは、それがジंकレールから送られたものだと推察し、大学の知人で、ジंकレールの高校に赴任することになったフォレン博士に彼への返事を託したのだとする。つまり、ジंकレールの本に紙切れを挟んだのも、直後に「アブラクサス」についての説明を与えるフォレン博士自身だと考えるのである。²³⁾ この解釈は、確かに事の詳細をうまく説明しているように思われる。しかし、仮に事実がそのような経過を辿ったとしても、デーミアンが手紙の差出人がジंकレールだと間違いなく察し、しかも返事を出さねばならない丁度そのときに、ジंकレールの高校へ赴任する知人を持っているというそのこと事態がきわめて稀な出来事だと言わねばならず、なぜそうした「偶然」が起こりえたのかという先と同様の疑問に再度直面することになってしまう。また、フォレン博士がジंकレールに直接デーミアンの返事を伝えず、わざわざ回りくどい、謎めいた手段をとることも説明できない。

他方、これとは逆に、ジंकレールがデーミアンの元の住所に手紙を送ったというような現実的なことにはさしたる意味はないという見方もある。つまり、重要なことはただ、彼がそのような形で手紙を出し、返事を受け取ったという事実そのものであり、それを可能にしているものは、ジंकレールとデーミアンの内的な結びつきなのだ、それによって、ジंकレールの呼びかけが時と場所を越えてデーミアンに通じるのだ、と言うのである。²⁴⁾ このような説明は、このエピソードにある種の超常的な性質を見ている点で、本稿における見方に近い点も見られる。しかし、その説明の仕方は、共時性という観点からすれば、適当なものとは言えない。というのも、ある人間の「呼びかけが時と場所を越えて通じる」という言い方では、通常「テレパシー」と呼ばれる、「生物体と生物体との間で、五感を介することなく起こる直接の交信」²⁵⁾ といった現象を説明するさいに抱かれがちな、「発信者」と「受信者」との関係が想定される可能性があるからである。²⁶⁾ そうなると、この出来事は「原因」と「結果」を持つ「因果論的」な現象として説明される——それこそまさにユングが「魔術的因果論」²⁷⁾ と呼んで否定しているものである——ことになり、共時性とは相容れないものになってしまうのである。

それに対し、この出来事の本質を共時性と捉える解釈においては、紙切れが置かれたのも、フォレン博士が説明したのもまったくの「偶然」である。その紙切れに書かれた内容は、確かにジंकレールが描いた「ハイタカの絵」と共通点を持つてはいる。だが、デーミアンと関連づけられる必然性はない。ジंकレールが鳥の絵を送ったやり方からしてもそうだし、その紙切れ自体は郵便でもなければ、デーミアンのことを示唆する目印さえ何一つ持っていない。ジंकレール自身、初めは同級生が時折授業中にそっとやりとりする

手紙の類だろうと考え、読みもせず、本の初めのほうに挟んでしまっていた。したがって、そのまま忘れられてしまう可能性さえあったのである。ところが、その手紙は、授業中まったく「偶然」に彼の手へ落ち、それを読んだ瞬間、ジंकレールは、それを躊躇なく「デーミアンからの返事」だと感じ、そこにある種の「運命」(305)を感じるのである。そしてまた、「稲妻のように」(306)意識の中に飛び込んでくるフォレン博士の言葉にも、彼は自己の人生とのつながりを感じる。「<神秘的なものと悪魔的なものを調和させる>という言葉が耳に残っていた。ここにいとぐちがあった。それはぼくたちの友達づきあいの最後の頃デーミアンと交わした対話以来、よく知っていたものだった。」(306f.)

このようにして、「偶然」が「単なる偶然」とは感じられず、何か「必然的」なものと思われ、そこに何か説明しがたいものの働きが感じられるということ、これこそまさに典型的な共時性体験であり、それに続くフォレン博士の説明もまた、そのようなジंकレールの心のありように呼応して布置されたものと考えられるであろう。ここには、共時性の持つ運命的意味や超越の意味がよく現われていると言える。

また、この出来事では、結果としてキリスト教の神とは異なる「善悪を包括する新しい神アブラクサス」が告知され、ジंकレールがその後歩むべき方向性が示唆されることになる。この意味で、この共時的現象は、ジंकレールが新たな発達段階へ移行しようとしているその典型的な元型的状況によって引き起こされたものとも考えられよう。²⁸⁾

(2) 第二の出来事

第6章、寄宿学校時代のある夜、ジंकレールは夜中に深い眠りから覚める。そして、家を出て、大きな不安に駆り立てられ、何かに強いられるように町を走り回り、暗い衝動に駆られながら、何をさがすとも知らずに探し回る。やがて、かつてクローマーが話をつけるためにジंकレールを引っ張り込んだのと似たような建物の前まで来たとき、彼は、何かに引きずられるように、その中へ入ってゆく。するとそこで、性的な衝動に悩み、自殺しようとしていた友人クナウアーに出くわし、彼を救うことになるのである。このとき、どうしてここへ来たのか、どうして自分を見つけることができたのか、と問うクナウアーに対して、ジंकレールは呆然としながら、捜していたわけではないと答える。「違うよ。引き寄せられたんだ。君は僕を呼び寄せたのかい？ そうに違いない。いったいここで何をしてるのさ。夜中じゃないか。」(329)

この出来事についても、二種類の解釈が試みられている。その一つは、この「神秘的な」出来事は、クナウアーが自殺の直前になって、それ以前の会話でのジंकレールの言葉の真の意味を悟り、それによって救われたのだとするものである。²⁹⁾ だが、この解釈は、ここでのジंकレールとクナウアーの出会いを現実の出来事とはみなさない点で、本稿における解釈とは異なる。一方、この場面でジंकレールを突き動かすものをデーミアンが人間の心の中にいると指摘した誰か、あるいはジंकレールが「アブラクサス」という名で呼びかけた存在と見なし、それを通じて彼がクナウアーの心と交感し合ったのだとする解釈もある。³⁰⁾ この見方は、何か通常理解を超えた働きによって離れた場所にいる人間同

士の心につながりが生じたとする点で、確かに本稿の解釈とも共通する面を有している。しかし、その原因や意味についての説明はなされていない。

だが、まさにその点についての説明を、共時性という概念によって補うことができるであろう。つまり、ここではクナウアーは自殺に至らないものの、一種の「臨死状況」という彼に訪れた危機が、超個人的な次元での布置を引き起こしたのである。ただし、それはあくまでも「原因」と「結果」という「因果論的」な事象ではない。ジंकレールには何が起きているのかわからず、クナウアーのほうでもなぜジंकレールがその場に訪れるのかわからないにもかかわらず、その二つの出来事が偶然にも同時に生起し、結果としてクナウアーは自殺から救われるのである。そして、そのときになって初めてジंकレールは、自分を駆り立てた不安の意味を悟るのである。

「ようやく今、ぼくたちの話のことを思い出した。あれはわずか四、五日前のことだったのだろうか。あれから一生涯も経ったような気がする。だが、今突然すべてがわかった。ぼくたちの間に起こったことだけでなく、なぜ自分がここに来たのかも、クナウアーがこんな町外れで何をしようとしていたのかも。〈じゃあ、自殺するつもりだったのか、クナウアー〉」(329)

また、しばらく時間が経った後にも、ジंकレールは、彼の人生においてクナウアーが持つ不思議だがある種運命的な意味というものを感している。

「だが不思議なことに、彼がよく奇妙で馬鹿げた質問を持ってやって来るのは、丁度ぼくの心の中に何か解決しなければならぬ難題があるときで、彼の気まぐれな思いつきや願ひ事が解決のためのきっかけをもたらしたのだった。彼のことが面倒くさくなって高飛車に追い返すこともよくあった。だが、それでもやはりぼくはこう感じていた。彼もまたぼくのところに遣わされたのだと。ぼくが彼に与えたものは、二倍になって彼からぼくに返ってきた。彼もまたぼくにとって導き手、あるいは一つの道だったのだ。」(330)

なお、この出来事のような「死にまつわる前兆」は、家族や「分析家と患者」といった、強い感情の絆で結ばれた親密な間柄で生じやすいという。³¹⁾ その点で思い出されるのが、このエピソードにおいて、クナウアーが性的な衝動に悩み、この出来事以前にジंकレールに助言を求めた人間だったということであろう。つまり、ジंकレールとクナウアーは一種の「分析家と患者」の関係にあるとも見なされるのであり、そこにこの共時的出来事の生起の一つの秘密があったとも考えられるのである。そして、結果的にジंकレールがクナウアーを救うことが出来たというところに、前者が他者の精神的指導者として成長したことが暗示されてもいるのであろう。

(3) 第三の出来事

第7章に入り、高校を卒業してから大学に入学するまでの休暇中、ジंकレールは、何年も前にデーミアンとその母親が住んでいた家を訪れる。家の持ち主である老婦は、デーミアン一家の消息を知らないが、ジंकレールの執心を見て取り、家の中に招き入れて、アルバムを取り出し、デーミアンの母親の写真を見せてくれる。すると驚いたことに、そ

れはまさしくジंकレールがかつて夢に見た像に瓜二つであった。

「だがその小さな写真を見たとき、心臓の鼓動が止まった。——これはぼくの夢の像だ！彼女だ。大柄な、ほとんど男のような女の像だ、息子に似ていて、母親らしい顔立ちと、厳しい顔立ちと、深い情熱的な顔立ちとをそなえ、美しくて誘惑的、美しくて近寄りがたく、デーモンにして母、運命にして恋人。これは彼女だ！」(337)

このエピソードについては先行文献ではまったく取り上げられていないが、心に抱いたイメージに現実の出来事が偶然に一致するという点でも、それがジंकレールにとって重大な意味を持つという点でも、共時的現象と見なされるべきであろう。そのことは、この瞬間にジंकレールがある種の超越的かつ運命的な感情に捉えられるところによく現われている。

「こうして自分の夢の像がこの世に生きていることを知ったとき、激しい奇跡のような感情に襲われた。ああいう顔立ちの女の人が、ぼくの運命の顔立ちをそなえた女の人があったのだ！」(337)

予測のつかなかった未来が、あたかも決定されていることであるかのように自らを現実化させてくるという意味で目的論的な必然性³²⁾が感じられるこの出来事は、ジंकレールの辿ってきた人生に揺るぎない確信を与えてくれるのである。

(4) 第四の出来事

その一方、高校時代の最後にピストリウスと訣別したジंकレールは、一枚の紙に「ある導き手がぼくを見捨てた。ぼくはまったく闇の中にいる。ひとりでは一步も前へ踏み出せない。助けてくれ！」(336)と記す。そして助けを求めるその紙をデーミアンに送ろうと思いつきながら、それを「愚かしくて無意味だ」(337)と感じ、実行しない。そもそも、デーミアンの居場所もわからないままで、二人はまったく音信不通である。ジंकレールがしたことは、「この短い折りを暗記し、自分の心の中へ唱える」(337)ことだけだった。ところが、数週間後、H大学に入学した彼は、ある晩、町の中をぶらついているうちに、偶然デーミアンに出会うのである。そのとき、不思議なことにデーミアンはジंकレールに、「君を待っていたんだよ」(339)と言う。それに対し、ジंकレールが、「ぼくがここにいるのを知っていたの？」(339)と尋ねると、デーミアンは、「知ってたというわけじゃないが、きっとそうなると思ってたんだ」(340)と答える。他方、長い間便りをよこさなかったことについてデーミアンに聞かれたジंकレールの方も、「しばらく前から、近いうちに君に会えるに違いないという気がしていたんだ」(340)と答えている。またこれに加えて、その後デーミアンの家でジंकレールがエヴァ夫人と初めて出会ったとき、彼女もまた、ジंकレールが昔送ったハイタカの絵を指差しながら、「この絵が届いたとき、あなたが私たちのところに来つつあることが分かりました」(345)と言っている。(ちなみに、第一の出来事で取り上げたジंकレールの絵がデーミアンに届いていたことは、このとき初めて明らかにされるのである。)

この再会についても、従来はまったく取り上げられていない。だが、これもまた精神的

指導者の喪失というジंकレールの危機的状況から生じた共時的現象と見なすことができよう。この出来事が単なる「偶然」ではないことは、それがジंकレールの人生を一変させるところによく現われている。家に帰り、床についたジंकレールの「全感覚が、この日が与えてくれた大いなる約束をひたすら待った。そうしたいと思えばすぐ、もう明日にでもデーミアンの母に会えるはずなのだ。(中略) 運命が新たな姿でぼくを迎えるのを待てばよいのだ。」(343) 実際、その翌日は、彼の人生のなかでもきわめて特別な日となる。

「自分にとって大切な日が始まったのだと感じ、周囲の世界が、待ち焦がれつつ、多くのつながりをもって、厳かに変化するのを見もし、感じました。かすかに降る秋雨も美しく静かで、祭日らしく厳粛で快活な音楽に満ちていた。初めて外の世界がぼくの内面の世界と一致したのだ。——かくして魂の祝日が訪れ、生は報われた。」(343)

なお、この出来事の場合特に注目に値するのは、これまで見てきた出来事のように二人の人間の間出来事ではなく、三者間の出来事となっており、超個人的な次元での布置に広がりを感じられる点であろう。この三者間の心の共鳴は、これに続く第五の出来事に至って、よりいっそう鮮明なものとなる。

(5) 第五の出来事

ジंकレールは、大学生活を送りながら、エヴァ夫人とデーミアンを中心とするグループとの交友を深めて行く。そこでは、とりわけヨーロッパの現状に対する批判が高まっていた。例えば、次のように言われている。「ぼくたちが集めたすべてのものから、ぼくたちの時代と今日のヨーロッパに対する批判が生じた。ヨーロッパは途方もない努力を払って人類の強力な新兵器を作り出したが、そのあげくに深い、そしてついには甚だしい精神の荒廃に陥ってしまったのだ。全世界を獲得したものの、そのために魂を失ってしまったからだ。」(349)

そんなある日、ジंकレールは、エヴァ夫人の家を出、町から離れて山のほうへ向かって歩いてゆく途中、黄色い雲と青い空と風でできた幻影を見る。「それは一羽の巨大な鳥で、青い混沌から抜け出し、大きく羽ばたいて空の中へと姿を消した。」(355f.) 彼は荒天の中を町へ戻り、デーミアンの部屋で今見た幻影のことを話し、あれは「ぼくのハイタカだった」(356) と言う。するとデーミアンは、ジंकレールがその鳥を見たのは「偶然じゃない」(356)、それは「運命の中の歩み」(356) を意味しており、「ぼくたちみんなにかかわりがある」(356) と言い、彼自身も、そしてエヴァ夫人も前日同じような夢を見たと言う。「同じことを昨日夢に見た。母にも昨日虫の知らせがあり、同じことを言っていた。——ぼくは、はしごで木か塔にのぼる夢を見た。上にあがると、辺り一帯が見渡せた。広い平野で、町や村ごと燃えていた。」(356f.) そしてデーミアンは、「全人類の運命が暗示される夢」(357) というものがあるのだと説明した後、彼が「数年前から見ている夢から察する」(357) に、「古い世界の崩壊」(357) という「予感がますますはっきりと強まっている」(357) と言う。こうした一連の出来事が、実際彼ら三人にとって、

いやそれどころか多くの人々にとって重要な未来を暗示していたのだということは、やがて戦争勃発という重大な出来事が生じたとき、初めて彼らに意識されるのである。

「何だって？ 戦争なのか？ そんなことは考えてもみなかった。」

だれも近くにいなかったのに、彼は小声で話した。

「まだ宣戦布告はされていない。だが戦争になる。信じていい。あれ以来この問題で君を煩わせることはしなかったが、あれから三度も新しい兆候を見たんだ。つまり世界の滅亡でも、地震でも、革命でもない。戦争になるんだ。」(360)

さて、この出来事については、ユング心理学的な観点からヘッセの作品を論じた研究において、無意識の持つ予知的な局面や集団に起こる出来事を予告する夢のはたらきと関連づけることはなされている。³³⁾ しかし、共時性という概念にはまったく触れられておらず、こうした現象が持つ意味にも触れられていない。

しかし、この予知的な夢や幻影が共時的な現象であることは言うまでもない。それは、未だ知られていない「戦争勃発」という危機的状況によって布置されたものなのである。ここではまず、夢がこの世界の時空を越えて、その外側の世界に関する出来事を告知している点に特色がある。つまり、「予知夢」の特徴として、あたかも波紋が先に起こって、その後で石が水面に落ちるかのような、通常の出来事の因果的な生起とは逆の順序による現象の生起が見られるのである。夢が未知の現実を告知していることは、後になって偶然確かめられるというわけである。それに加え、この出来事の場合特に注目に値するのは、同じような内容を持った夢がジंकレールとデーミアンとエヴァ夫人という複数の人間によって見られているという点である。すなわち、「共有夢」ないし「共通夢」という現象が見られるのである。水面に投げられた石の波紋が円になって広がるように、一つの「元型的状況」を契機とする「布置」が、つながりを持つ複数の人間へと広がっているわけである。³⁴⁾

ついでながら、ここでは、個人の魂の出来事とヨーロッパ世界の出来事との間に強い共鳴が起きていることも、注目に値しよう。ジंकレールは、戦争勃発という世界の成り行きを知った瞬間に彼を貫いた戦慄を、次のように表している。

いよいよ戦争が起きるのだという。ぼくたちが何度も何度も話し合ったことが、いよいよ起り始めるのだ。そしてデーミアンは、そのことをとてもよく予知していたのだ。何と不思議なことか。今ではもう世界の流れはどこかぼくたちのそばを素通りしたりしない。——それは、今や突如として、ぼくたちの心臓の真っ只中を流れるのだ。冒険と荒々しい運命がぼくたちを呼び寄せ、世界がぼくたちを必要とし、世界が変化しようとする瞬間が、今かあるいはすぐにもやってくるのだ。(361)

個人の魂と世界との有機的かつ運命的なつながりに対するこの目覚めこそ、共時性をも

たらず重要な影響の一つであり、近代ヨーロッパ流の世界観の克服という本作品の主題とも深く関わっているのである。

3. 『デーミアン』における「共時的」現象の役割と意味

以上のように見てくれば、『デーミアン』という作品において、共時的な現象がいかに重要な役割を有しているかは明らかであろう。

第一に、この作品において、共時的な現象は、いずれも筋の展開に不可欠な要素となっている。それらは、「アブラクサス」という新たな神との出会い、クナウアーの自殺の救済、ジंकレールの夢の像とエヴァ夫人の姿の一致、大学町でのデーミアンとの再会、戦争勃発という世界的な出来事の予知といった、物語の展開に欠くことが出来ず、しかもジंकレールの人生にとって大きな意味を持つ場面で生じているのである。つまり、この作品では、共時的現象がその重要な構成要素となっているわけである。

そして第二に、このことは作品の本質とも深く関わっているように思われる。すなわち、西洋社会に対する批判、とりわけその合理主義的な考え方や自然科学偏重に対する批判というテーマである。つまり、ジंकレールという人間の生において、合理主義的・因果論的に説明され得る出来事よりも、むしろ非合理かつ非因果的な出来事が重要な役割を演じ、大きな意味を有するという点に、合理主義的な考え方とは異なる世界観が、具体的な形で告知されているというわけである。その新しい世界観を一言で言えば、——共時性概念の説明でも触れたような——深いレベルにおいて他者と宇宙に対するつながりを感じながら、心理的・物理的なものを超えたある種の超越的な力を感じ、畏怖の念を抱きつつ生きる、ということになろう。こうして、この作品に見られる共時的現象は、西洋的な合理主義的世界観の更新という作品の主題と表裏一体をなしているのである。

『デーミアン』という作品における共時的な出来事が有するこのような重要性を考慮したとき、この作品に関する従来の研究において、それがまったく注目されなかったことは片手落ちと言わざるを得ない。初めに見たように、ユングの提唱する共時性概念は近代合理主義に対する批判的要素を併せ持っているが、『デーミアン』という作品はそのユングの心理学から多大な影響を受け、同じく西洋的な世界観の更新をテーマとしている。その意味で、今後、『デーミアン』の考察においては、そこに見られる共時的現象とその意義に十分注意が払われねばならないであろう。

注

- 1) これについては、例えば次の文献が該当する。Maier, Emanuel: Demian. (1950) In: Materialien zu Hermann Hesse »Demian«. Band. 2. Hrsg. von Volker Michels. Frankfurt am Main: Suhrkamp 1997, S. 83-112; Dahrendorf, Malte: Hermann Hesses »Demian« und C. G. Jung. (1958) In: Materialien zu Hermann Hesse »Demian«.

Band. 2, a. a. O., S. 129-149; Gohar, Soheir: Der Archetyp der Großen Mutter in Hermann Hesses »Demian« und Gerhart Hauptmanns »Insel der Großen Mutter«, Frankfurt am Main/ Bern/ New York/ Paris: Peter Lang 1987; Baumann, Günter: Hermann Hesses Erzählungen im Lichte der Psychologie C. G. Jungs. Rheinfelden/ Freiburg im Breisgau/ Berlin: Schäuble 1989.

- 2) 「共時性」については、ユング研究者による先行研究が多数あるが、それについては、拙論『ユング——因果的思考からの脱出』（田中邦夫・高津孝編著『知のポリフォニー テキストによる人文科学入門』松柏社、2003年、55～66頁所収）と田中彰吾『〈意味のある偶然の一致〉の現象学——ユング理論の再検討を中心に』（関西学院大学出版会、2005年）の参考文献表を参照されたい。なお、本稿における「共時性」理論の解釈は、田中彰吾の研究に負うところが大きい。上記著書を参考にしたのみならず、不明な点について照会したところ、大変詳しく丁寧な説明を頂戴した。記して感謝申し上げる。
- 3) Jung, C. G.: Über Synchronizität. In: C. G. Jung Gesammelte Werke. Bd. 8. Hrsg. von Marianne Niehus-Jung u. a. Olten und Freiburg im Breisgau: Walter 1971, S. 555-566. (以下、Über Synchronizität.と略記する。)
- 4) Jung, C. G.: Synchronizität als ein Prinzip akausaler Zusammenhänge. In: C. G. Jung Gesammelte Werke. Bd. 8, a. a. O., S. 457-553. (以下、Synchronizität als ein Prinzip akausaler Zusammenhänge.と略記する。) なお、邦訳は、C. G. ユング (河合隼雄訳)『共時性：非因果的連関の原理』（C. G. ユング/ W. パウリ [河合隼雄・村上陽一郎訳]『自然現象と心の構造——非因果的連関の原理』海鳴社、1976年、1～146頁所収)。
- 5) Synchronizität als ein Prinzip akausaler Zusammenhänge, S. 466.
- 6) Vgl. Synchronizität als ein Prinzip akausaler Zusammenhänge, S. 477f.; Über Synchronizität, S. 560.
- 7) Synchronizität als ein Prinzip akausaler Zusammenhänge, S. 477f.
- 8) Über Synchronizität, S. 560f. なお、訳文は田中彰吾、前掲書、20頁に拠る。
- 9) Vgl. ebenda.
- 10) Vgl. a. a. O., S. 556f.
- 11) 例えば1945年11月 J. B. ライン宛書簡 (田中彰吾、前掲書、76頁) 参照。
- 12) Synchronizität als ein Prinzip akausaler Zusammenhänge, S. 476.
- 13) A. a. O., S. 480.
- 14) Vgl. Jung, C. G.: Theoretische Überlegung zum Wesen des Psychischen. In: C. G. Jung Gesammelte Werke. Bd. 8. S. 183-261, hier S. 242.
- 15) A. a. O., S. 258.
- 16) Synchronizität als ein Prinzip akausaler Zusammenhänge, S. 553.
- 17) A. a. O., S. 552.

- 18) 「共時性」の意義については、田中彰吾の研究に基づいてまとめたものである。田中彰吾、前掲書、14～16、53～57、62、71～79、90、93、101、110～115、128～131、139～140、145～153頁参照。
- 19) Vgl. Synchronizität als ein Prinzip akausaler Zusammenhänge, S. 477.
- 20) ヘッセの1917年9月8日の日記によれば、このとき「中国の話」も話題に上った。(Vgl. Hesse, Hermann: Traumgeschenk. Hrsg. von Volker Michels. Frankfurt am Main: Suhrkamp 1996, S. 94.) これについて、小澤幸夫は、具体的には「古代中国哲学」、とりわけ「老子」や「易経」についてであろうと述べている(小澤幸夫「ヘッセの『夢日記』と『デーミアン』の成立」〔神奈川大学「国際経営論集」14号、1997年、97～132頁所収〕104、120頁参照)が、ユングは『易経』や『老子』に、「共時性」観念とのかかわりを見ている。(Vgl. Synchronizität als ein Prinzip akausaler Zusammenhänge, S. 491ff., 520ff.)
- 21) 例えば、ジंकレールが自分の部屋で意識を集中してエヴァ夫人に呼びかけると、彼女がそれを感じ取って、デーミアンを送り出すこと、戦場でジंकレールが雲の中に見る女神の幻影から放射された星の火花の接近が、彼の負傷をもたらすこと、野戦病院に横たわるジंकレールの隣にデーミアンが横たわっていることなど(いずれも第8章)が共時性と関連づけられる可能性を有している。しかし、これらについては、ジंकレール自身によって出来事の意義づけがなされていないなどの理由により、本稿では割愛した。
- 22) Hesse, Hermann: Demian. In: Hermann Hesse: Sämtliche Werke in zwanzig Bänden. Hrsg. von Volker Michels. Frankfurt am Main: Suhrkamp 2001-2005, Bd. 3, S. 233-365, hier S. 303. (なお、以下、本作品からの引用については、引用直後に頁数のみを記す。)
- 23) Vgl. Ziolkowski, Theodore: The Novels of Hermann Hesse. A Study in Theme and Structure. Princeton/ N. J.: Princeton University Press 1965, S. 92.
- 24) 岡越良平「ヘルマン・ヘッセ『デーミアン』——シンクレールの成長を中心に」(大阪市立大学文学部「人文研究」第19巻6分冊、1968年、99～123頁所収)112頁参照。
- 25) 笠原敏雄『超心理学研究』(おうふう)1994年、83頁。
- 26) 同書、81頁参照。
- 27) Synchronizität als ein Prinzip akausaler Zusammenhänge, S. 518. なお、「テレパシー」と「共時性」の違いについては、田中彰吾、前掲書、34～37、50、87頁も参照。
- 28) 個人の心理的成長と「元型的状況」との関連については、田中彰吾、前掲書、74頁参照。
- 29) 岡越良平、前掲論文、114頁参照。
- 30) 春山清純「対立物の統合という神話——ヘルマン・ヘッセの『デーミアン』について——(中)」(神戸女子薬科大学「人文研究」第13号、1986年、39～61頁所収)、

52～53頁参照。

31) 田中彰吾、前掲書、35頁参照。

32) 同書、93頁参照。

33) Vgl. Baumann, Günter, a. a. O., S. 73f.

34) 「共有夢」、「共通夢」、および「予知夢」の特徴については、田中彰吾、前掲書、25、36、37、95頁参照。

付記 本稿の内容の一部については、「アジア・ゲルマニスト会議」（2006年8月28～31日、於ソウル大学）において、ドイツ語による口頭発表を行った。

Über „synchronizitätische“ Erscheinungen in Hesses „Demian“

Kenichi TAKEOKA

Diese Abhandlung beschäftigt sich mit „synchronizitätischen“ Erscheinungen in Hermann Hesses „Demian“ (Entstehung 1917). Die „Synchronizität“ ist ein wichtiger Begriff aus der Psychologie C. G. Jungs und bedeutet „akausale, sinngemäße Koinzidenz“ wie der sechste Sinn, das Hellsehen und die Prophezeiung. Im „Demian“ gibt es nicht wenige solcher Erscheinungen. Aber sie wurden bisher fast nicht untersucht.

So soll hier zuerst die „Synchronizität“ als Begriff in der Jungschen Psychologie festgelegt werden. Besonders im Hinblick auf ihren Sinn in der modernen Zeit. Sie ist einerseits zwar ein „irrationales“ Erlebnis. Aber andererseits kann sie eben deshalb eine Antithese gegen den „Dualismus von Ding und Seele“ und die „rationale Weltanschauung“ sein, die die moderne Wissenschaft begründen.

Weiters werden die folgenden fünf Situationen in „Demian“ in Bezug auf die „Synchronizität“ betrachtet: (1) Sinclair schickt ein von ihm gemaltes Bild an Demian, ohne den Absender anzugeben. Trotzdem erhält er eine Antwort, die von Demian zu kommen scheint, und deren Inhalt ihm der Hilfslehrer Follen kurz danach zufällig erklärt; (2) In einer Nacht erwacht Sinclair aus dem Schlaf und geht, getrieben von einer großen Unruhe, ohne Ziel durch die Stadt. Dann begegnet er seinem Schulkameraden Knauer, der eben Selbstmord begehen will, und rettet ihn; (3) In den Ferien nach seiner Schulzeit besucht Sinclair das ehemalige Haus von Demian. Dort findet er zum ersten Mal, dass das Bild von Frau Eva, der Mutter Demians, seinem Traumbild völlig gleicht; (4) Sinclair, der von Demian Hilfe braucht, begegnet ihm zufällig in der Universitätsstadt H.; (5) Gegen Ende der Geschichte sieht Sinclair am Himmel ein Bild eines riesengroßen Vogels, das Demian als Andeutung des Menschenschicksals deutet. Nach Demian träumen auch er und Frau Eva etwas Ähnliches. Er sagt also den Zusammenbruch der alten Welt vorher. Kurz danach bricht der Krieg aus.

Aus der Betrachtung dieser Erscheinungen wird Folgendes erklärt: Die „Synchronizität“ spielt in „Demian“ eine unentbehrliche, wichtige Rolle. Zugleich hängt das mit dem Thema des Werkes, also mit der Kritik an der rationalen Denkweise, eng zusammen. So sollte in zukünftigen Betrachtungen von „Demian“ auf die darin erscheinende „Synchronizität“ Acht gegeben werden.